

セイモア・イートン  
——会員制駅前図書館の展開と『ルーズヴェルト・ベアーズ』  
シリーズにみる19世紀末アメリカの読書空間

杉 山 恵 子

Seymour Eaton:  
The Tabard Inn Library and *the “Roosevelt Bears”* Series

Keiko Sugiyama

**Abstract**

Seymour Eaton (1859–1916), the educator and entrepreneurial author, introduced new methods of distributing books through the Booklovers Club, a nationwide membership library, and The Tabard Inn Library, which were located in popular outlets such as drugstores at railroad stations. They were intended to respond to the needs of working people. In his later career he wrote books for children. In this paper, I will argue that his efforts and messages help create a culture which supported Theodore Roosevelt’s image. I will also argue that though he had to close down these libraries, his attempt to educate and to alter the conventional reading practices is significant.

**Keywords:** Seymour Eaton, Theodore Roosevelt, library, children’s literature

キーワード：セイモア・イートン, セオドア・ルーズヴェルト, 図書館, 児童書

はじめに

19世紀末から20世紀初頭のアメリカ合衆国は南北戦争後の北部主導による国家統一形成に向けて大きなうねりの中にあった。連邦制度の再編, 強化は行政の長, 行動派

大統領の登場で代表される革新主義運動という名で歴史家たちに呼ばれてきた。本論は行動派大統領を受け入れる世論作りに一役買った人物に焦点を当てることで、この時代を振り返る試みである。

取上げるのはセイモア・イートン（1859－1916）、その出自も資料不足で追えない人物である。しかし、産業化、都市化、移民の流入で混乱するこの連邦再編の時代に突如出現し、人々の読書習慣に目を向けその組織化を試みた人物である。背景には鉄道に代表される市場機構の変化、農村地域の変貌、それによって齎された社会不安がある。イートンはその経歴をまず都市に集中する農村出身者・移民・労働者の基礎学力の支援、地方公務員資格取得教育に専心することから始めたが、晩年は児童書にそのエネルギーを集中させた。それはアメリカ全土を視野に入れた新しいアメリカ観作りに貢献することであった。連邦制度の要となる行動派大統領、セオドア・ルーズヴェルトへの支援を家庭に届けることになったからである。晩年に到るイートンの業績をみることは、アメリカにおける移民・労働者教育のあり方、大学・専門学校、夜間学校、各種図書館、公立図書館、通信教育など20世紀初頭のアメリカ市民教育の役割、その混沌とした状況を再考することにつながるだろう。教員時代に鍛え培ったビジネス手腕と教養教育への危機感が生んだ駅前図書館の発想、読者層の組織化とその盛衰は、政治・政党の再編の裏側にあった20世紀初頭のアメリカ文化を映し出す鏡になるだろう<sup>1)</sup>。

## 1. 実務教育・資格取得の支援

セイモア・イートンは1859年カナダ、オンタリオ、イッピングに生まれ、1916年にフィラデルフィアで亡くなっている。教師を志し、ウィニペグ・ビジネス・カレッジと呼ぶ教育活動を始めたのは1884年のことである。その後、1886年に結婚、ボストンに移り住んだ。6年間を過ごすこのボストンでホーム・スタディ・コレスポンデンス・スクールと呼ぶ通信教育を始めた。残念ながら、この間の資料は手に入らない。しかし、ビジネス・カレッジやホーム・コレスポンデンス・スクールの名で、イートンがやろうとしていたことは当時の出版物、さらに、ドレクセル・インスティテュート芸術・科学・産業学校（後のドレクセル大学、以下ドレクセル大学）採用後の活動で見ることが出来る<sup>2)</sup>。

イートンがフィラデルフィアに移り、ドレクセル大学で教鞭を取ったのは1892年のことである。当時は大学教育が社会のニーズに合わせて多様化する時代であった。ア

アメリカ合衆国において、大学はハーバード大学に代表されるように、入植後の牧師を輩出する大学として1636年に始まっている。植民地時代から続く東部の私立大学はリーダーを輩出するエリート校として君臨してきた。アメリカの西進とともに、南北戦争以降、地方に次々と創られたのは、ランド・グラント（土地付与）大学と呼ばれる公的負担で生まれた大学である。国立大学の無いアメリカで州の管轄下にある州立大学である。地域の教育者を育て、農民教育を当初目的とした。さらに、19世紀末には富豪となった鉄道王や企業家たちが創設した私立大学が加わった<sup>3)</sup>。ドレクセル大学も資産家、アンソニー・J・ドレクセルが創立したものである。しかし、シカゴ大学やスタンフォード大学のような東部エリート校と競い、ドイツを手本とした大学院教育を充実させていく総合大学をめざす方針を退け、ドレクセル大学は当時需要が急増していた事務職者の教育・養成に 대응することを選んだ。女子大学の設立も視野にあったというが、近くにプリンマー女子大学の企画があったことから、断念したという<sup>4)</sup>。女子エリート教育からも方向を転換し、ドレクセル大学がとった方針は、都市に集中し始めた若者を相手にした実務教育であった。学位取得を謳わず、どのような経歴の持ち主でも、女性にも男性にも、実践教育の機会をつくるというものであった。働きながら学べる夜間講座や、秘書講座、全米でいち早く図書館の司書を養成するプログラムをはじめたのもこの学校であった。設立当初の理事会の記録は学校経営の手探りの様子を伝えている。受講者は昼間の学生数より、はるかに夜間の学生数のほうが多かった<sup>5)</sup>。働く人々が容易に通えるようにと、鉄道拠点に最初の校舎を構えたのも、創立者の思いを表している。大理石の巨大な建造物、古典回帰の内装、中央におかれたサモトラケのニケ像、その下の通路に掛かる大きな時計。労働者の学校と銘打ったその姿は、啓蒙精神と、時間厳守を醸し出すみごとな空間になっている（写真①）。こうしたドレクセル大学の初期の精神と取り組みはイートンを採用する背景にあったことだろう。イートンのほう



写真① ドレクセル大学 メインビルディング エントランス・ホール（本論著者撮影）

はそれまでの取り組みをさらに発展させる好機と見たに違いない。

イトンがディレクターであった商業・金融学部のパフレットを見てみよう<sup>6)</sup>。「成功者とは、つまるところ成功したビジネスマンのことをいう…人の帳簿管理に甘んじることなく、自ら起業することである。われわれは経営者になることを教えるのであって、経営者のもとで記録するだけの人材を養成するところではない」と学部の方針が高らかに謳われている。そして、この目標達成のためにとビジネスの基本を教えるカリキュラムが紹介される。製造業の仕組み、流通の販売の基礎、株式会社・会社経営の基礎、営業の基礎、商品の仕入れ、市場調査、ローンと信用、銀行の仕組み、宣伝と広告、会計と簿記の基礎講座の数々。こうした授業に加えて職業と直結するコースも用意されていた。1. 簿記講座 2. 速記講座 3. 私設秘書講座 4. 公務員試験講座である。ことに力をいれているのは公務員試験講座であり、当時、連邦、州、市に新しく生まれているそうした新しい公務員のニーズに応えるコースを提供できる学部であることを明記している。これらのコースへの受講条件であった入学試験の科目は英語、地理、アメリカの歴史の3科目であった。英語学習と広く世界に向けられた新しい地理観、市民教育の根幹としての世界の中のアメリカを問う歴史観が挙げられている。イトンはこの学部でディレクターまで上り詰め、教えた講座をもとに数々の書籍をテキストとして出版した。

イトンの著作の傾向をみると、『ビジネス100の練習帳』<sup>7)</sup>といったタイトルが示すように、臆することなくビジネスを始められる段階別指導書がまず挙げられる。さらに、地方公務員受験用の本、地理、歴史の解説本、手紙の書き方、ビジネス文書の書き方指南書が続く。こうした多岐にわたる自習用図書は新しい読者のニーズを伝えている。都市流入者が望む最新の手引書、ハウツー物であったことだ。『エヴリデイ・エデュケイター』<sup>8)</sup>という名の通り、毎日、自学自習する人達用の学習書であった。またイトン自身の出自を思わせる、教員用と銘打ったものも多い<sup>9)</sup>。こうした出版の成功に背中を押されたのであろうか。成功者たれと自身が教えていたビジネスの手法をみずから実践へ移したかったのだろう。野心家であった<sup>10)</sup>。地道な教員生活に終止符を打ったのである。ドレクセル大学の資料によると、わずか5年で大学を退いた。推測するしかないが、後年、「ドレクセル大学の名を騙って、ビジネスを展開するのは不愉快である」といった大学長の手紙が残っている<sup>11)</sup>。そこには、イトンへの不快感が明らかである。経営難の中、めまぐるしい大学の改組、改編が続く中でイトンと大学関係者の間で齟齬が生じていたのであろう。あるいは手引書の類では

なく、イートン自身が教養関連の著作に傾倒していったのかもしれない。次にみるように、自身が設立した会員制図書購入クラブや会員制駅前図書館で謳っているのは、新しい時代にふさわしい教養書を提供することであったからである。また読者層の拡大も視野に入っていた。ビジネスと教養書の普及の双方を社会的な要請のなかで、工夫していくイートンの手腕、使命感の表れといえる。大学を去ってイートンが始めた試みを次に見ていこう。

## 2. 教養書の提供——会員制図書購入クラブと会員制駅前図書館

1900年、イートンは一般図書の啓蒙のために、ブックラヴァーズ・クラブ（愛書家友の会）という名の会員制図書購入クラブを始めた。資本金60万ドル、有志から集めた資金を株式会社方式で運用したようだ<sup>12)</sup>。このブックラヴァーズ・クラブは流通業としての商品の図書をサービス業と結びつけた、いわばビジネスと知識の普及を同時に展開するイートンの野心的な活動を象徴している。フィラデルフィアに拠点を置き、500冊ほどの書名が並ぶカタログを会員に送るカタログ商法だった。迅速に書籍を届けるサービスを謳った。ブックラヴァーズ・クラブのメンバーは余裕のある、中産階級層であったようだ。実用書の読者層とは異なることから、購買意欲の増した読者層に、さらに販売の市場を広げようとした意図が見受けられる。5ドルのメンバーシップ代金が払えることが条件だった。人に先んじて新しい本が手にはいることがメンバーには好評だったようだ。また2冊、3冊と購入するたびに割引制度が適用された。余裕が出来た層の所有欲をくすぐる仕掛けをしていたのである。

カタログの冒頭でライブレリアンと自称するイートンは新しい読書習慣作りに指南係が必要であることを明言している<sup>13)</sup>。会員権、通信販売、アドバイザーの存在と極めて新しい方式を導入しようとしていた。商品の「品揃え」とも言うべきカタログの選書の傾向をみると、何より早く、話題の本が手に入ることを謳っている。カタログには「新しい」や「最新」の見出しが躍る。公立図書館が整わない中、図書館に行けない人たち、図書館ではにわかに入らない新しい図書、書店の整わない地域の読者に応えるイートンの姿勢がみえる。図書の分類にまだなじみの無い読者に向け、自由裁量の分類がなされていることも重要だろう。選書には必ず選書理由が添えられており、手っ取り早く内容を知ることができた。まず彼の作り出したカテゴリーの例を挙げよう。

購入する折には番号でのみ、申込用紙に記入することになっていたため、書名の冒

頭には番号が振られている。手に入る1900年版のカatalogの1から5までは「人気小説5選」。チャーチルの歴史小説『リチャード・カーヴェル』がその一冊に選ばれている。次に「楽しめる回想録6選」が挙がる。回想録を好む世代がまずはターゲットだろうか。ジュリア・ワード・ハウなどが薦められていることは女性の読者もターゲットにしているということだろう。「女性作家」のカテゴリーや「女性向け」と銘打ったものも多い。「伝記4選」、さらに「自伝2選」が続く。ジェームズ・ラッセル・ローウェルが最初に挙がり、ベンジャミン・フランクリン、ウィリアム・ペンと続くのは、フィラデルフィアに拠点を置くゆえであろう。伝記の最後はリンカーンである。ニューマン・ホールの自伝やジョゼフ・パーカー牧師の著作が挙がる。イトンが19世紀後半の「精神的支柱を確かめるための読書」と銘打って、もっとも力を入れて薦めるカテゴリーの一つである。文学作品の総説、全体像を読者に伝える簡便な書物も多く選ばれている。少年向き、少女向きというカテゴリーがあるのも、思春期という発達過程が注目された当時を反映したイトンの選書の特徴である。後に児童書を書き始めるイトンの片鱗を示すものだ。社会情勢を知るための本も多く挙がり、社会改革の先鞭をつけたジェーコブ・リースの著作や腐敗の構造を読み解くための市政の解説書が推薦されている。「社会問題を考える2選」ではブッカー・T・ワシントンの『黒人の未来』、ホームレスを装って、ヨーロッパ、アメリカを放浪したジョサイア・フリントの『貧乏放浪記』が挙がり、世界観を変える2冊と絶賛している。Catalogの最後、545番はアンドリュー・カーネギーの『富の福音』である。後の成功した姿より、若き日のカーネギーを是非若者に読んでもらいたいと結んでいる。入門書や実用書の書き手であったイトンだがここに受験用のお助け本はない。新しい思想、思潮を伝えるもの、国内の現状を伝える作品、海外作家の紹介、見聞録など海外の事情に目配りした広範な選書が続く。また芸術に関する書籍の推薦が多いのも想定した読者向けだろう<sup>14)</sup>。

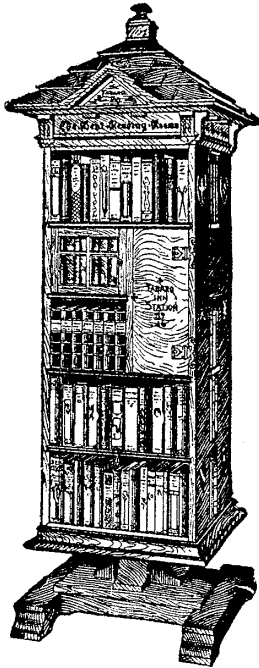
そうした傾向をより表すのが、会員に配布された、ブックラヴァース・マガジンだろう。高級絵画や調度品の広告は、読者層が明らかだ。移民を背景に広がる社会不安から、伝統的な審美形式が好まれ復古主義が生まれていた時代でもある<sup>15)</sup>。上昇志向の読者に訴えるものであったろう。年間購読料3ドル、一冊25セントで始まったカラーの豪華な挿画入りマガジンの発行である。(1903. 1月創刊)「大学長」特集、「鉄道王特集」に加えて、最新の美術界の動向を毎回のように伝えている。「絵画の楽しみ方」、「貴重本特集」なども購入層が豊かであることを物語っている。「百貨店」特集や「ヨーロッパ旅行」関連の記事も同様だ。「エマソン生誕百年記念」特集や「話

題の女流小説家」特集も編集者イトンの選書傾向を現している<sup>16)</sup>。イトン自身が雑誌編集の成功者を夢見て創刊したであろうことはその第一号が「雑誌編集者」特集であったことから見て取れる。『雑誌の背後にいる男たち』では「センチュリーマガジン」のリチャード・ワトソン・ギルダー、「スクリブナー」のチャールズ・スクリブナー、「レイディーズ・ホーム・ジャーナル」のエドワード・ボック、「ハーパーズ・ウィークリー」のジョージ・ハーヴェイなど時代を牽引する編集者の特徴、雑誌の傾向を手短にまとめたものから始まっている。かれらの影響力に憧れていたのだ<sup>17)</sup>。

イトンにとって編集者が夢であったことは、彼が残した唯一の小説のタイトルにも伺える。『ダン・ブラック——編集者・経営者』（1901）には新聞の編集者・経営者を名乗る主人公、ダン・ブラックが登場する。厳しい社会批判の社説で知られるブラックが、食堂で働く美しい移民女性に恋をする話だ。最後には病魔に犯され瀕死となったその恋人を祈りの力でよみがえらせる。陳腐な筋書きの中に19世紀を生きたイトンの憧れと20世紀に齎された野心が同時に語られている。イトンの選書傾向を見ていく上で鍵となる著作である<sup>18)</sup>。

さらにイトンはこの会員制図書クラブと同時に1902年には、駅前図書館という新しい発想の図書館を発足させた。こちらでも会員制でその名をタバード・イン図書館という。大学を去り、啓蒙教育者、編集者、出版者、経営者として活路を見出し、成功を夢見たイトンの行き着いた結果であった。この新しい図書館の形態は最盛期には鉄道、船付き場、ホテルなど人々の往来のあるところ、人々が待ち時間に手に取りやすいところを求めて1500箇所に及んだという。置かれた本が一目でタバード・イン図書館のものとわかるように装丁を工夫し、目につきやすくしたという。一冊ずつ保護用ケースに入り、赤い帯の目印がつけられていた。時代の要請に応じてどのような形で読書習慣を根付かせるか考え抜いた結果であった。回転式の本棚が目印であり、広告にも必ず登場している。最初の5ドルを払えば終身会員となり、以降タバード・イン図書を差し出せば、5セントの安価で新しい本と交換できると説明している（図②、③）。

タバード・インの名はジョン・バニヤン『天路歷程』の主人公が出発した宿の名である。プロテスタント世界で最も広く読まれた宗教書であり、教訓物語のその名を選んだことは、つつましい回転書架の「図書館」の実態とそぐわない。しかし、イト



A TABARD INN BOOK CASE

図② 回転式書架, タバード・イン図書館  
(*The Booklovers Magazine*, Vol. IV. No  
IV. October, 1904 の広告欄に掲載)



図③ タバード・イン所蔵図書ブックプレート(本論著者所蔵)

ンの信仰と、巡礼をイメージした自分の境遇をその名に重ねているのかもしれない。読書によって導かれ辿りつく世界への強い思いを会員に伝えたかったのかもしれない。カタログ商法と同時に展開されていたため、選書傾向は同じである。文学、哲学、宗教書、そして何より目新しい新刊のなかから読むべき本を選んで図書を提供するサービスを売りに展開された。人々が動くことを前提に、A 駅のタバード・イン図書館で購入した本も B 駅のタバード・イン図書館で返却し、また新たに購入できる便宜を図った。安価で次々と図書を購入し続けるネットワークを夢見た。新しいということ売りにしたので、3-6ヶ月で本が入れ替わったという。消費者となった読者層に応えることを謳っているのである<sup>19)</sup>。中産階級向けであった通信販売の会員制図書クラブの内容を働く一般の人々に拡大しようとしたのだった。多様な読者層に応え、変化に取り残されない新しいアイデアを持ち込むイートンのビジネス精神を表す経営であった。



この世間の動向を見逃さない方針がイートンに次の展開を生んだ。当時のルーズヴェルト大統領の人気を児童書に取り入れたのである。ビジネス手腕にたけたイートンは経営方針を転換し仕事の重点を児童書に移した。その背景には、会員制図書クラブや駅前図書館の経営が思わしくなかったことがある。ブックラヴァース・マガジンのほうはアップルトン・マガジンが経営を引き継いだことにはなっているが、会員制読書クラブと駅前図書館はわずか5年で閉鎖に追い込まれた。

閉鎖の過程を知る手がかりは資料として手にはいないが、1919年のクリストファー・モーレイの著作『亡霊本屋』に、タバード・イン図書館の末路をみる箇所がある。登場人物の青年が訪ねたドラッグストアの隅に回転式書架、タバード・イン図書が並んでいるのだ。埃を被った書名を一瞥しながら、彼がその時代遅れの「懐古趣味的」書籍の名に一瞥を投げる場面である。打ち捨てられた印象は否めない。もっともこのうち捨てられ誰も注目しない書架に置かれた空の本の保護用ケースが犯罪とかかわっている、というのがこの『亡霊本屋』という古本屋を舞台にした小説のプロットなのだ。大統領ウッドロウ・ウィルソンを船上で爆破しようとする親独の人々の計画の拠点回転式タバード・イン図書を設置していたドラッグストアで、その地下が爆弾製造所なのである。時は第一次大戦直後である。爆弾はウィルソンの愛読書といわれる、トーマス・カーライルの『オリバー・クロムウェル』に仕掛けられ運ばれていくのである。タバード・インの書架が犯罪の伏線になるほど怪しく、落ちぶれたイメージとなってしまったとみるか、あるいは本がそうしてタバード・イン図書館を移動していく、イートンが夢見たネットワークが人々の脳裏にイメージされているからこそそのプロットなのか、判断に迷うところである<sup>20)</sup>。何れにせよ、イートンが当初夢見た面影は無い。あれほど時代に乗り遅れまいとしたイートンの選書は時代遅れになってしまっていた。一方、ドレクセル大学時代からの実用本や文学作品の編著書本はホームスタディサークル・ライブラリーとして存続、それらは、アメリカンカレッジコースと1912年に名を変え、1919年のイートンの死後も手軽な入門書として出版が続いた<sup>23)</sup>。

イートンが手がけた出版業、編集業、会員制図書館の運営をどのように評価すべきであろうか。試行錯誤しながらイートンはまず大学や学校に行けない人々が入手できる自習目的の本を送り出した。イートンの学習帳はどれもフィラデルフィア出身のベンジャミン・フランクリンの切磋琢磨する姿を髣髴させる自己研鑽の書である。背景

には都会に出た若者たちの立身出世へのゆるぎない想いがある。それを汲み取って、度量衡の知識、綴り字や署名の仕方、正しい英語、手紙の書き方などの基礎教育をイートンは重視した。当時、登用制度が整いはじめた「地方公務員試験合格」といった新しく生まれたニーズに応えようとしたこともこの時代を象徴している。さらに、カタログ商法という新形式の通信販売を書籍において導入した。世界が急速に変化するなか、人々が抱く「遅れまい」とする不安に見事に応えながら、本を届ける新しいシステムを張り巡らす。さらに会員制駅前図書館である。鉄道網、交通網の発展に事業の拡大を夢見る起業家イートンである。こうした20世紀初頭の日常生活に読書習慣を広げるビジネスと知識の普及の展開がイートンの業績だった。

しかし、無料が条件である公立図書館が充実してくると、それらは時代遅れになっていく<sup>22)</sup>。とはいえ、この読書習慣の空白を利用した、イートンの公共奉仕の精神とビジネス手腕こそ当時のアメリカの発展と轍をひとつにしたイートンを映し出しているだろう。そして、最後に彼の名をもっとも有名にしたのは、当時の大統領の名を冠した二頭の熊を主人公にした児童向け連載であった。

### 3. 児童書の人気

イートンは多くの仕事と並行して、韻を踏んだ覚えやすいリズムで熊を主人公にした読み物を新聞や雑誌に仮名で投稿していた。人気を収めたため、ペンネームを改め、実名に切り替え、『ルーズヴェルト・ベアーズ』シリーズとして、1905－8の間に全四巻にまとめられた。長年の教育・啓蒙活動が最後に形をとったのがこの児童書のシリーズといってよいだろう。当初の四冊をばらばらにし、テーマ別に再編集して、異なったタイトルを冠して次々と安価で販売された<sup>23)</sup>。

物語の発端はコロラド、当時の開拓地の最前線である。二頭の熊がハンターから奪った衣装を身に着け、東を目指す旅にでるという設定だ。ハンターの衣装にルーズヴェルトの名があったので、拝借したというのが第一巻の発端だが、これはのちに大統領セオドア・ルーズヴェルトの人気と歩調を合わせる中で、大統領のお墨付きであることの証明としてその名を冠したと語られていく。第二巻では、大統領の子供たちも読んでいます、という注が添えられる<sup>24)</sup>。はるか西部の開拓地を出立して訪ねるのはシカゴ、ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィア、ピッツバーグ、ワシントンD.C.とどれも農村出身者が憧れる大都会である。

この本の目的は、第二巻の冒頭にイートン自身の言葉で次のように説明されている。

この本でわたしは、子供たちに動物たちが、熊でさえも、人間とおなじような心をもっていることを教えたかった。動物の第一の存在意義が必ずしも、人間の狩りの標的ではないことをである。この教えが正しかったことは、多くの読者に本書が愛されたことが証明している。昔から使われた、「熊に連れて行かれるよ。」といった子供への脅し言葉がもはや通用しないことがわかるだろう<sup>25)</sup>。

恐ろしい熊を愛らしい熊に変える担い手を宣言しているイートンである。これには、セオドア・ルーズヴェルトと熊に関する当時のエピソードが背景にある。セオドア・ルーズヴェルトは、幼少期からひ弱で、肉体的な劣等感、いじめられた体験の補完作用として、その性格が説明されてきた人物である。一生をかけて、自己鍛錬を課し、男らしさを演出した。狩りの名手でもあった。自分を支えた生き方を「奮闘的生活」と名づけ、困難に立ち向かい、恐れず、努力する姿こそ、偉大な国を作り出す国民に必要な資質であると説いた<sup>26)</sup>。その大統領が熊を撃ち殺すのに待ったをかけたエピソードに当時の人々は熱狂する。1902年、ミシシッピ州とルイジアナ州の州境の調停に呼ばれた折の話である。州境の調停というきわめて西進するアメリカの現実、また拡大した連邦政府の役割を象徴する大統領の訪問に、担当者は狩りの日程を組み入れた。しかし、その日に獲物は現れず、困ったお付きは仕留めた瀕死の熊を差し出した。この仕組まれた狩りを大統領は好まなかった。

この話は後日二つの展開を生んだ。ひとつは愛らしい子熊を撃たなかった慈悲深い大統領を創り上げることになった。クリフォード・K・ペリーマンによるイラストがワシントン・ポストの挿絵となって人々に流布されたからである<sup>27)</sup>。もうひとつはその挿絵を元に、大統領の愛称デディの名を持つ熊のぬいぐるみ、デディベアの誕生をみたことである<sup>28)</sup>。

フロンティアとよばれる人口過疎地域は1890年代に姿を消し、先住民の制圧も完了した20世紀の転換期に、連邦大統領自らが制圧すべき恐ろしい辺境の熊が愛らしく生まれ変わる引き金を引いたのであった。この筋書きと大統領の人気を利用して、イートンは大統領の名を冠した熊を登場させたシリーズで追随したのである。珍道中の物語、あらすじを見ていこう。

第一巻では、コロラドの山で「奮闘的生活」を実践していると自負する二頭の熊が主人公であると知らされる。ルーズヴェルト大統領のうたい文句を実践しているのだ。その名をテディ B とテディ G という。B と G はグッドとバッドの違いではないと断りながらも、どちらかといえばルールを守るテディ B といたずら好きのテディ G、子供たちにわかりやすく役割を使い分けている。二頭は、脅した狩人が慌てて逃げる際に落としていった品々で東部の文明世界に興味を持ち、「銀行を買ってみせる」と豪語してコロラドの開拓地を出発することになる。鉄道を始め、あこがれる最新の乗り物を乗り継いで東海岸までたどり着く。高級車両のプルマンではあまりの傍若無人ぶりに列車から降ろされるなど大人たちには嫌われ者だが、学校を訪ねてはこどもたちの人気者だ。既存の教育現場が機能していないことを露呈させていく。行く先々で、「努力を惜しんではいけないよ。男らしいスポーツをやって切磋琢磨するのだよ。強い意志を持てるようになるのだよ」<sup>29)</sup>とまるでルーズヴェルト大統領を代弁した叱咤激励を子供たちに残していく。旅行中は各地で名所、旧跡を訪ね歩く。ハイライトはナイアガラ観光、そして建国の史跡、ボストン、バンカーヒル、プリマスである。最後にはハーバード大学で学位をもらうことになるのだが、課題はロバに乗って講堂三周といった、学位を茶化したかな熊でもある。学位に憧れながらも信用しない、当時の西部人の東部観の代弁者のようだ。ボストンでは路上の子供たちの中から、案内役を募集してボストン見物を終え、ニューヨークに向かう。

第二巻目になると都市で働く新しい職業が続々と登場する。町の消防士に挑戦してみる。タイプライターを試してみる。新聞の発行を取材から、印刷などの工程を全てやってみる。まるで子供たちへの職業紹介、体験学習である。子供たちと仕上げた新聞には『熊が世界を支配したら、狩られるのは人間のほうだ』という社説である<sup>30)</sup>。主客転倒を謳い、なにごとにもしり込みしない。貧しい子供たちに孤児院を立てたいとその目標を掲げて東部諸都市を巡るのである。

最後は目的地ワシントン D.C. で当時の大統領ルーズヴェルトに会うことである。狩りの名手と聞いたルーズヴェルトに撃たれるのではと武装してホワイトハウスを訪れるのだが、その心配も杞憂に終わり、自分たちを歓迎する大統領に狂喜する熊たちで終わっている（挿画④）。まるで西部開拓地域の将来をこの大統領に託す確認に訪れたかのような結末になっている。面会を終えた主人公の熊たちは、コロラドが懐かしいとふるさとへ帰って行く。帰る故郷のある幸せを語るのである<sup>31)</sup>。第二巻のあとがきをかざるのは、紳士気取りの二頭が田舎に残る裸の熊たちに土産や熊のぬいぐる



挿画④ *The Roosevelt Bears Go To Washington*, p. 178. Illustrated by R. K. Culver



"They had gifts for each brought in the East, and they passed them round at the evening feast."

挿画⑤ *The Roosevelt Bears Go to Washington*, p. 185. Illustrated by R. K. Culver

みを持ち帰る姿である（挿画⑤）。

観光旅行というサービス精神満載ながら、このシリーズでは、西と東を結ぶ重要性、歴史施設の確認、連邦政府を束ねる大統領の求心力が児童書のなかで確認されている。このシリーズは「熊は恐れるものではなくなった」と辺境のおわりを説く以上に、見事な国家統一の使命を果たしていた。主人公は連邦統一を象徴する行動派大統領の使者となったのである。そしてそれは最後に帰る西部のあることを印象づけたのであった。

ルーズヴェルトの名を冠した使者を演じる以上、この熊たちは海外にも出かけていく。訪ねるのはロンドン、パリ、オランダ、ドイツ、ロシアそしてスイス。この旅行記が第三巻目である。ここでも恐れを知らぬ熊たちの珍道中はヨーロッパ各地の名所旧跡で流血の歴史を笑い飛ばす。「アンクル・サム」（アメリカ合衆国の擬人化された呼び名）の代表者として堂々と国王に謁見に行くのである。野蛮だと笑われながらも、反対にヨーロッパの歴史、国王の権威をこき下ろす。そして最後はイタリア、トルコ、エジプトへの旅を夢見るところで終わっている。熊たちは国内統一の役割のみならず、海外にまで堂々と出て行き主張する熊に変化したのであった<sup>32)</sup>。

イトンの作り出した熊たちはアメリカを代表するメッセンジャーとして、広く家庭の子供たちに流布されていった<sup>33)</sup>。イトンが夢見た自己研鑽、そして読者層の変化を読み取り新しい読者層を創り上げようとしてきた野望はこの熊たちによる児童書、それを読み聞かせる家庭教育に行き着いた。アメリカの新しい使命感と海外へと向かう視線を送り込むことに辿り着いたのであった。

おわりに

イトンにとって、誰でもどこでも本を手にとることができるようにと、鉄道、船着場を拠点にした新しい図書の流通網を作ることが夢であった。カタログが家庭に届くことで生まれる読書習慣作りが夢であった。それらの努力は叶わなかったが、晩年児童書を通して、家庭教育の中に入り込むことに成功した。都会に出てきた者たちに、都会での成功を支援することに始まった経歴は、その後も常により広い読者の獲得を目指したものだ。そのイトンが最後にたどり着いた境地、それは都会への誘惑に野心を抱きながらも、西部の我が家に帰ってほっとする思いを主人公に語らせることであった。当時の多くの人々の共通する思いであったことだろう。変動期に人々が求めた東部での成功への憧れ、遅れまいと思う知識への渴望、ネットワークが繋ぐ安心、そして旅して帰る開拓地の我が家の存在、それらを代弁する役目を熊たちの珍道中を通して描いて見せた。しかしそれは同時に幼時期に新しいアメリカ像、大統領像を焼き付けることになっていったのである。

イトンが書籍の所有・購買意欲に応えようと夢見て叶わなかった全国規模の会員制図書購入クラブ、毎月定期的にベストセラー本を届けるブック・オブ・ザ・マンズ・クラブの誕生は皮肉にもイトンの亡くなる1916年であった<sup>34)</sup>。しかし、空白を埋めようと奮闘したイトンの業績は20世紀初頭のアメリカの読書空間、大学、図書館、通信教育など混沌とした市民教育の役割を見ていく上でも、秩序や権力を支える文化の役割を見て行く上でも忘れてはならないものに思われる。

注

- 1) 南北戦争後から20世紀初頭はアメリカ合衆国の転換期であり、その後のアメリカを決定付けたといっても過言ではない。この国民国家が自明でない時期の秩序作りの重要性を語る書物は枚挙に暇が無いが、Robert H. Wiebe, *The Search for Order, 1877-1920*, New York: Hill and Wang, 1967, Daniel T. Rogers, *Atlantic Crossings: Social Politics in a Progressive Age*, Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1998, Alan Dawley, *Changing the World: American Pro-*

- gressives in War and Revolution*, Princeton: Princeton University Press, 2003. などが挙げられる。
- 2) イートンの自伝、伝記はない。勤務先であった Drexel University, W.W. Hagerty Library, Philadelphia に勤務記録、担当講座の資料などわずかなものが残る。本論ではイートンの著作、編集業績を資料とした。その偏りは否めないが、その評価は可能であるという立場に立った。
  - 3) Christopher J. Lucas, *American Higher Education: A History*, New York: Palgrave MacMillan, 2006. F. ルドルフ『アメリカ大学史』阿部美哉・阿部温子訳、東京：玉川大学出版部、2003。
  - 4) Edward D. McDonald and Edward M. Hinton, *Drexel Institute of Technology 1891-1941---A Memorial History*, Philadelphia: Drexel Institute of Technology, 1942. Chapter One in David A. Paul, *When the Pot Boils: The Decline and Turnaround of Drexel University*, Albany: State University of New York Press, 2008, pp. 1-13.
  - 5) “Minutes of the Board of Managers of the Drexel Institute of Art, Science and Industry,” 1897年の4月は、昼978：夜1442, 8月は、797：1184, 10月は、665：1036など月ごとに変動をみせているが、毎月夜間履修登録者数が上回っている。W.W. Hagerty Library, Drexel University, Philadelphia, Penn. U.S.A. なお理事会記録にはイートンの採用記録は残るが退職時の記載は見つからない。
  - 6) “Drexel Institute of Art, Science, and Industry, Philadelphia, James MacAlister, LL.D. President, *Department of Commerce and Finance*, Seymour Eaton, Director, 1896-97” W.W. Hagerty Library, Drexel University 所収 入学者募集パンフレット。
  - 7) Seymour Eaton, *One Hundred Lessons in Business*, Toronto: A. Riley, 1891.
  - 8) Eaton, *Every-day Educator: A Manual of Self-Instruction and Useful Information*, Boston: W.P. Bullard & Co. Publishers, 1892.
  - 9) Seymour Eaton and Evelyn S. Foster, *Five Hundred Exercises in American History: Teachers' Hand-Book Series*, Boston: Educational Publishing Co., 1890. Seymour Eaton, *How to Write Letters*, New York: Arthur Hinds & Co, 1892 などが好例であろう。「疲れた教員は楽が出来る。生徒には学ぶ喜びを齎す本」と自賛している。
  - 10) Matthew Schultz, *Image of America: View of Landsdowne*, Dora, New Hampshire: Arcadia Publishing, 1996. 邸宅を写真で紹介し、成功者イートンを伝えている。
  - 11) James MacAlister to Professor Victor Coffin, January 23, 1901. W.W. Hagerty Library, Drexel University. イートンが「1897年に退職しているにもかかわらず、ドレクセルの名をいまだ出版の際に使用し、ブックラヴァーズ・ライブラリーを展開し、大もうけしていると聞く。彼とは何のかかわりもなく、これからもかかわるつもりは無い」と明言している。マッカリスターは当時ドレクセル大学の学長。身元照会に答えた文面であろう。
  - 12) Seymour Eaton, *Catalogue: The Booklovers Library*, Philadelphia, Anno Domini, 1900. 本拠はフィラデルフィアだが、ニューヨーク、シカゴ、ボストン、ブルックリン、ワシントン、セントルイス、ニューワーク、バッファロー、クリーブランド、デトロイトに支部があると記載されている。
  - 13) 責任者兼司書を扉で明記している。

- 14) Eaton, *Catalogue*. passim.
- 15) T.J. Jackson Lears, *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880–1920*, Chicago: University of Chicago Press, 1981.
- 16) *The Booklovers Magazine*, Vol. 1, Jan–June 1903, Philadelphia: The Library Publishing Company, 1903. “The Man behind the Colleges,” pp. 110–123, “The Man behind the Railroads,” pp. 334–342, “Picture and Art Talk: How to Enjoy Pictures,” pp. 31–41, “Rare Old Prints for a Unique Collection,” pp. 606–621, “Ralph Waldo Emerson 1803–1903,” pp. 148–181, “How to Spend a Six weeks Holiday in Europe,” pp. 464–477, “The Great Department Store: Men, Mechanism and Methods——Managers and Management of the Modern Store,” pp. 448–463. などのタイトルが挙がる。
- 17) “The Man Behind the Magazine,” *The Booklovers Magazine*, Vol. 1, No. I. Jan. 1903, Philadelphia: The Library Publishing Company, pp. 6–15.
- 18) Seymour Eaton, *Dan Black: Editor and Proprietor: A Story*, Philadelphia: The Library Publishing Company, 1901.
- 19) Edith Anderson Rights, “The Cover,” *Libraries and the Culture Record*: spring 2006: 41.2, pp. 258–263. タバード・イン図書館に関する数少ない情報を載せている。“The Booklovers Magazine and a Tabard Inn ‘Exchangeable’ Book” in *The Booklovers Magazine*, Vol. IV, No. IV, October, 1904. この巻にはタバード・イン図書館の宣伝がページ数のないまま随所に掲載されている。文化に関心ある人々に支持されていることを誇り、つぎつぎと新しい本と交換できるシステムと運営方法を解説している。
- 20) Christopher Morley, *The Haunted Bookshop* (1919), New York: Doubleday, Page & Company, 1923.
- 21) Seymour Eaton, *The Home Study Circle Library: English Literature——Johnson to Dickens*, New York: The Doubleday & McClure Co., 1900, *Home Study Circle Library: American Literature——Irving, Bryant, Cooper, Emerson*, New York, The Doubleday & McClure Co., 1901 などシリーズで続いた。
- 22) 川崎良孝, 『図書館の歴史——アメリカ編』, 東京: 日本図書協会, 2007。Wayne A. Wiegand, *Main Street Public Library: Community Places and Reading Spaces in the Rural Heartland, 1876–1956*, Iowa City,: University of Iowa Press, 2011.
- 23) Seymour Eaton (Paul Piper), Illustrated by V. Floyd Campbell, *The Roosevelt Bears: Their Travels and Adventures* (1906), New York: Dover Publication Inc., 1979, *The Roosevelt Bears Go to Washington* [(Unabridged republication of *More About Teddy B and Teddy G* (1907)], New York: Dover Publication Inc., 1981, *The Traveling Bears Across the Sea: Their Travels and Adventures* (1907), New York: Barse & Hopkins Publishers, 1916, *The Traveling Bears in Fairyland: Their Travels and Adventures*, New York: Barse & Hopkins Publishers (1908), 1917.
- 24) Eaton, “More About These Bears,” *The Roosevelt Bears Go to Washington*.
- 25) Eaton, “About These Bears,” *The Roosevelt Bears: Their Travels and Adventures*.
- 26) Theodore Roosevelt, *The Strenuous Life* (1905), Bedford, Mass.: Applewood Books, Inc. 1991.



- 27) Linda Mullins, *The Teddy Bear Men: Theodore Roosevelt and Clifford Berryman*, Grantsville, Maryland: Hobby House Press, 2002. p. 42. ベリーマンが熊をより小さく、愛らしく、ルーズヴェルトをより慈悲深く描くようになって行ったと指摘している。イートンも便乗したルーズヴェルト人気を物語る傾向といえる。
- 28) *Ibid.* pp. 75–78. ルーズヴェルトは熊のぬいぐるみを選挙キャンペーンにまで利用した。*Ibid.* p. 129. 児童心理への熊のぬいぐるみの影響とその変化を追ったものに、Donna Varga, “Savage Beasts Into Innocent Children, 1890–1920, *The Journal of American Culture*, Volume 32, Number 2, June, 2009, pp. 98–113. 野性的な熊からぬいぐるみの愛らしい熊への橋渡しをした例のひとつに『ルーズヴェルト・ベアーズ』シリーズを挙げている。
- 29) Eaton, *The Roosevelt Bears: Their Travels and Adventures*, p. 81.
- 30) Eaton, *The Roosevelt Bears Go to Washington*, p. 169.
- 31) *Ibid.*, p. 18.
- 32) Eaton, *The Roosevelt Bears Across the Sea*, p. 44.
- 33) イースト会社の宣伝にも使われた。ケーキ作りを子供たちに教える小冊子が残る。子供たちを手伝うのは『ルーズヴェルト・ベアーズ』シリーズ第四巻に登場する児童文学作品の登場人物である。*The Teddy Bears Baking School* (Compliments of The Fleischmann Co.) Copyright 1905–1907 by Seymour and Edward Stern & Co., Inc. マザーグースに登場する人物と熊たちがてんやわんやでケーキを作る冊子は、家庭に広くイートンの作り上げた熊たちが受け入れられている証拠であろう。幼児用カップや皿にも絵柄が使われた。
- 34) Janice Radway, *A Feeling for Books: The-Book-of-the-Month Club, Literary Taste, and Middle-Class Desire*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1997.